

## しが協働部活プロジェクト主催

<つながる・かがやく・かわる～環境学習推進ネットプロジェクト>

12/3「体験プログラム・環境ほっとカフェ」に関する

# アンケートまとめ

(平成19年1月)

テーマ 「今、地域のために何ができるか? ～施設の外の活動を考えてみよう」

日時 平成18年(2006年)12月3日(日) 14:15～16:00

出席者 (コーディネーター) 水野 敏 明氏 (WWF ジャパン 自然保護室淡水生態系担当)  
(コメンテーター) 井 阪 尚 司氏 (県立環境学習支援センター 所長)  
(コメンテーター) 上 野 浩 文氏 (ウォーター・シェン琵琶 流域連携支援事務局リーダー)  
(コメンテーター) 牧 野 厚 史氏 (県立琵琶湖博物館学芸員 学芸員)  
(事例報告者) 青 木 伸 子氏 (県立琵琶湖博物館はしかけ「びわたん」メンバー・  
しが協働部活プロジェクトメンバー)  
(事例報告者) 泉 浩 二氏 (河辺いきものの森 スタッフ)  
(事例報告者) 今 井 友 幸氏 (県立水環境科学館 スタッフ)  
(事例報告者) 小 田 貴 志氏 (県立近江富士花緑公園 副公園長)  
(事例報告者) 金 尾 滋 史氏 (多賀町立多賀の自然と文化の館 学芸員)  
(事例報告者) 角 川 咲 江氏 (西堀榮三郎探検記念の殿堂 学芸員)  
(事例報告者) 中 村 友 美氏 (県立朽木いきものふれあいの里 指導主任)  
(事例報告者) 森 永 紗 江 子 氏 (県立琵琶湖博物館はしかけ「びわたん」メンバー)  
(事例報告者) 山 田 勇 氏 (栗東自然観察の森 スタッフ) 【各五十音順】

場 所 琵琶湖博物館 企画展示室

【体験プログラムについて】

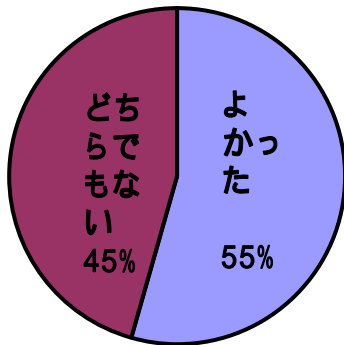
体験プログラムはどうでしたか。(1つ選択)

- ・よかった
- ・どちらでもない
- ・よくなかった

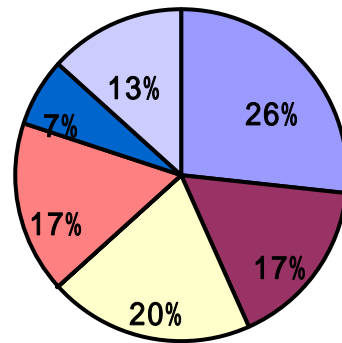
なぜそう思われましたか。(複数選択可)

- 他の施設のプログラムを見ることができた
- 自施設をPRできた
- 自施設で行っている体験プログラムをPRできた
- 参加者が一度に多様なプログラムを体験できた(見られた)
- 準備不足であった
- 体験のための時間が短かった
- 他の施設のプログラムを見る余裕がなかった
- その他( )

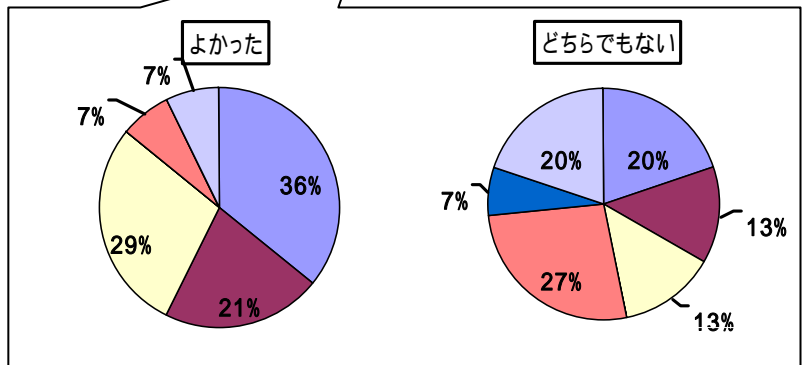
<アンケート結果>



その理由？



その他の意見  
 「どちらでもない」  
 ・他施設のスタッフと交流ができた  
 ・体験スペースが狭かった  
 ・参加者が少ない  
 ・場所が悪い  
 ・企画趣旨が参加者に分かったか不安



- 他施設のことあまり知らない -

体験プログラムを「よかった」と回答したのは55%で、「どちらでもなかった」の45%を10ポイント上回った。「よくなかった」との回答はなかった。

よかった理由として「他施設のプログラムを見られた」「自分の施設やプログラムをPRできた」という回答が多く、また「スタッフの交流ができた」という意見もあり、各担当者間でも他施設についてはあまり知らない現状がうかがえる。

どちらでもない理由として「時間が短かった」「他を見る余裕がなかった」という回答が多く時間設定の課題があがり、また実施場所の位置や広さ、趣旨が分かったかどうかなどの意見もあった。

## 【環境ほっとカフェについて】

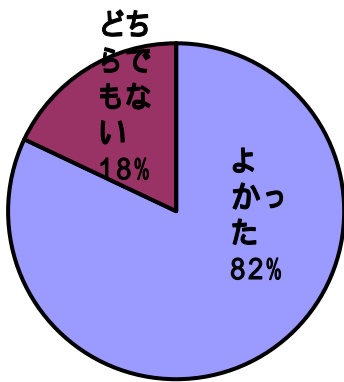
環境ほっとカフェはどうでしたか。(1つ選択)

- ・よかった
- ・どちらでもない
- ・よくなかった

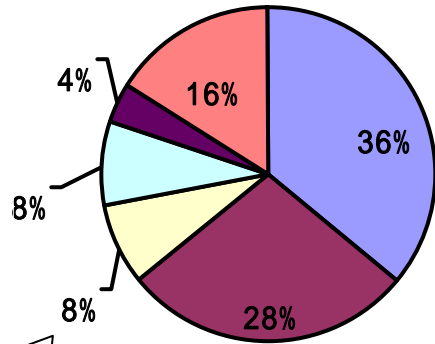
なぜそう思われましたか。(複数選択可)

他の施設の状況や考え方を聞くことができた  
 他施設の担当者を知り合いになれた  
 施設をPRできた  
 設定時間や人数の関係から議論が深まらなかった  
 テーマが分かりにくかった・難しかった  
 その他( )

<アンケート結果>



その理由?



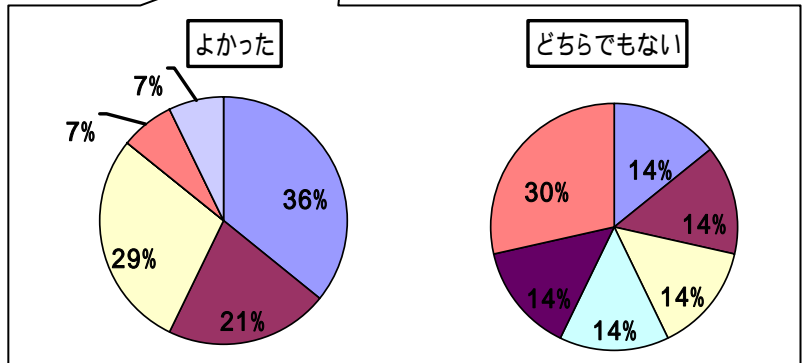
その他の意見

「よかった」

- ・実際に他施設の方と顔を合わせて話すことができた

「どちらでもない」

- ・企画の対象がやや不鮮明
- ・テーマと各施設が抱える課題に開きがあったように感じた
- ・現場の生の声が聞けた



### - 8割がカフェを開催してよかったと回答 -

ほっとカフェを「よかった」と回答したのは82%で、「どちらでもなかった」の18%をおおきく上回った。「よくなかった」との回答はなかった。

よかったと回答した8割の人が「他施設の状況や考え方を聞いた」「知り合いになれた」「自分の施設をPRできた」と感じていて、他施設の状況把握やPRの場として評価された。

どちらでもない理由としては「議論が深まらなかった」「テーマが分かりにくかった」「企画の対象がやや不鮮明」という回答があった。

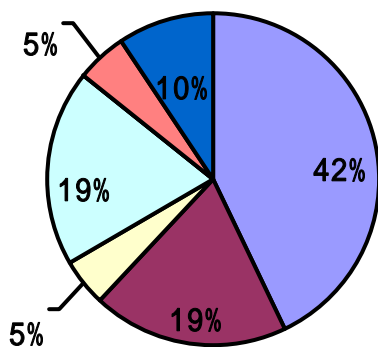
## 【施設間の連携について】

施設間の連携を進める場合、どのような取り組みがよいとお考えですか。

複数施設間で共同企画・プログラムを実施する  
 広報紙や体験日程等の情報交換を密にして他施設の広報も行う  
 学校等の団体に対する受入窓口の一元化する  
 環境学習のつどいのような「見本市」を開催する  
 連携する必要はない  
 分からない  
 その他（ )

<アンケート結果>

約6割が共同企画プログラムや見本市など具体的な取り組みがよいとしており、情報交換システムの構築も約2割あった。



その他の意見

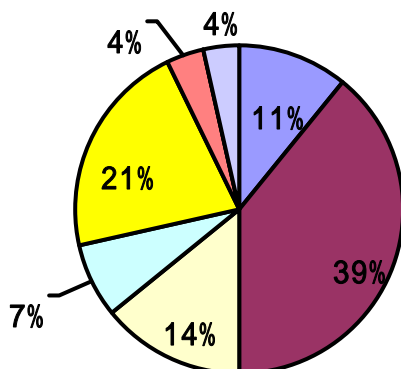
- ・まずは施設スタッフが複数で他施設へ行き交流する
- ・互いの施設の活動内容を知るための交流会の開催
- ・まず互いの施設の現況（良い面悪い面）を知る（現場スタッフの交流）

施設間の連携を進めるメリットについて、どうお考えですか。

来場者を増やすことができる（ことにつながる）  
 新たな視点や環境以外の観点が入ること等により取り組みの質を上げられる  
 広い地域で住民の環境に関する意識を高められる  
 様々なところで施設をPRすることができる  
 異分野の視点を取り入れられる  
 メリットはない  
 分からない  
 その他（ )

<アンケート結果>

6割が環境だけでない新たな視点が入ることによるプログラムの質的の向上をあげ、来場者の増加や住民意識の向上はそれぞれ1割程度であった。



その他の意見

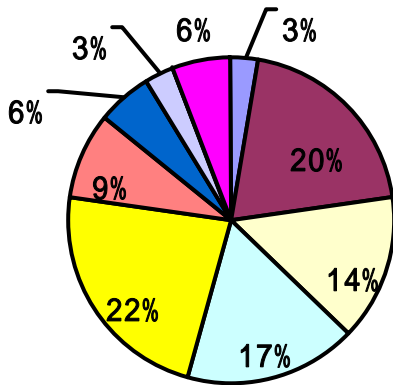
- ・資金、人員の面で負担が軽減できる
- ・現場スタッフの交流ができる

施設間の連携を行おうとする際の障害には、どのようなものがあるとお考えですか。

どのように連携を進めていいかわからない  
 事前の打合せや調整に時間や労力がかかる  
 スタッフの異動期間が短く連携のためのノウハウが蓄積されない  
 人員体制に限界があり対応できない  
 予算に限界があり対応できない  
 施設としての活動範囲に制約がある（例：町外）  
 コーディネーターがいない  
 他施設の情報が少ない  
 特に障害はない  
 その他（ )

<アンケート結果>

事前調整の負担、人員体制や予算上の限界、スタッフのノウハウ不足など回答は分かれた。なお、障害がないという回答はなかった。



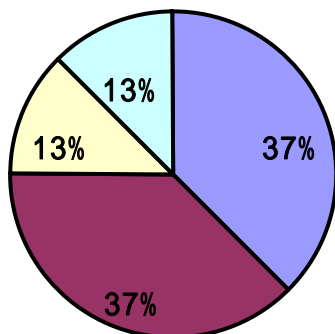
その他の意見  
 ・連携を行おうとする人がいない  
 ・連携した際に双方のメリットが見つからない（片方だけが多い）

今後、施設間の連携を進めようとする場合、どのような対応がよいとお考えですか。

今回のカフェのような意見交換の場を設定する  
 具体的な連携に向けて検討を行う  
 各施設の自主性に任せる  
 その他（ )

<アンケート結果>

今回のような意見交換や具体的な連携に向けた検討の実施がそれぞれ約4割あり、各施設の自主性に任せるは13%にとどまった。



その他の意見  
 ・事例を増やしていく  
 ・連携を進めていく上でのやる気のあるキーパーソン（スタッフ）の存在

環境学習施設として、日頃、感じられていることや課題があればご記入ください。(記述)

- ・南極という非日常をどのように生活と結びつけて身近なものとするか
- ・イベントを計画実施する際に、環境へのメッセージ性だけでなく「気軽に参加できるか」「魅力があり集客力があるか」という要素が重要であると痛感している。
- ・森での維持的な学習ができていない(単発的)
- ・環境学習はサービスか? 対価がもらえない。(人件費が出ない 人手不足)
- ・県の各部局で環境学習を進めているが、連携が不足している。NPOや民間施設との連携とともに、県庁内の連携が大切。例えば青少年室の「こども体験学校」パンフに朽木が載っていない。
- ・大変参考になった。今後もこのような取り組みがあれば参加したい。
- ・連携にはまず自施設の充実が必要であり、指定管理者1年目はこれを超えて一步前に出たい。2年目は予算、人員の問題をクリアして何か一つでも実のあることができると考えている。
- ・連携を呼びかけているのは県レベルの事業や施設が多いので、市町村の環境学習施設としては人員、経費、業務の面から負担が大きいと思う。事業をこなすだけの事業でなく、ボトムアップの連携や県レベルの施設が市町村、私立レベルの施設の現状をきちんと理解し、サポートが図れる連携が必要であると感じる
- ・「環境」というと自然保護、水質などに頭がいかってしまうが、歴史、文化でも深く考えたら環境と人間の関わりにつながっているという視点(琵琶湖博物館のテーマ)が大切である。

#### - 次に向けて -

協働部活プロジェクトが主催した「体験プログラム」「環境ほっとカフェ」は、施設間の連携を促進していくためには、まず担当者同士が知り合いになり、互いの実情を知ることが必要であるという認識から企画したが、アンケートからも各施設ともほぼ同様の認識であることが分かった。その意味では、所期の目的は達成したと考えている。

最終年度となる19年度は、関係者の理解と協力を得ながら、様々な具体的な活動に取り組み、単発にならないような継続性のある仕組みづくりに取り組んでいきたい。